
 その他

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 9
P.52-57 (2021)

実技を伴う授業（生活援助技術）におけるオンラインによる リアルタイム授業の試み

How to plan a Synchronous Online Class with Practical Skills (Basic Nursing Skills) .

廣瀬 允美*
HIROSE Masami

石塚 淳子*
ISHIZUKA Junko

小元 まき子*
OMOTO Makiko

高桑 優子*
TAKAKUWA Yuko

笹野 幸春*
SASANO Yukiharu

山本 哲子*
YAMAMOTO Tetsuko

要 旨

新型コロナウイルス拡大の影響を受け、本学部においても自宅で受講できるリアルタイム授業が実施された。1年生の授業「生活援助技術」において、授業終了後アンケートにより学生の意見を聴取したため、今後の授業設計の参考にしたい。

「生活援助技術」は1年生にとって初の看護技術を習得する授業であり、リアルタイム授業でどこまで学習が行えるか危惧された。しかし、最後の授業のみ演習が実施できたこともあり、124名中98.3%の学生が「今後看護を学ぶ上で役にたった」と評価した。講義に対する意見では、「看護の基礎」や「根拠」を学べたこと、教員の実践や実演により映像を通し看護技術を体感できたこと等が評価されていた。また、課題に対するディスカッションを行う「グループワーク」も良かったと述べられ、学生間で活発に意見交換し主体的に学びを深められていた。そして約半数の学生が演習における実践の重要性を実感していた。

学生が知識を吸収しやすい「実演」や主体的に参加できる「グループワーク」を講義に組み入れ、最終的に実践において知識に基づいた技術を確認していく等の効率的な授業設計が望ましいと考えられる。

索引用語：基礎看護技術、リアルタイム授業、オンライン授業、アンケート調査
Key words : Fundamental Nursing Skills, Synchronous On-line Class, Distance Class,
Survey by Questionnaire

1. はじめに

我が国では、2020年1月から新型コロナウイルスの国内感染状況が正式に発表され¹⁾、その後2020年

4月の時点で、約9割の大学等における通常授業の開始時期は延期され、オンライン授業の実施を決定又は検討がされた²⁾。本学部においても、2020年度前期の授業は全てオンライン授業に切り替える方針が定められた。しかし、看護学生1年生の基礎看護学における授業「生活援助技術」は、技術演習を伴う実践を

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

(Nov. 6, 2020 原稿受付) (Jan. 15, 2021 原稿受領)

前提にした授業内容でありオンラインでの授業は特に困難を極めた。また、ネット環境自体も学生教員共に準備が整わない状態でのスタートであったため、全員が定時にネットにアクセスができない、途中で回線が途切れる等というアクシデントに当初よく見舞われた。これらのトラブルに対処しながら、毎回授業後に行うリフレクションを元に授業内容の改善を重ね、徐々に新しい授業方法に慣れていくことができた。

2020年12月現在、大学に馴染みの少ない1年生を優先的に登校させる大学の方針により、1年生のみ授業を対面で実施することができている。しかし、このコロナ禍はまだまだ先が見えない状況であり、依然他の学年はオンライン授業中心の大学生活を余儀なくされている。今後、対面以外の授業方法も取り入れた臨機応変な授業の在り方を検討する必要があると思われる。そこで、今回、生活援助技術の全12回授業終了後に行った学生アンケートからオンライン授業（今回はリアルタイム授業を実施）による学びや思いを明らかにすることで、今後の授業設計の参考にしたい。

II. 方法

1. 生活援助技術の授業項目（表1）

表1 2020年度「生活援助技術」授業項目

回数	学習項目
1	授業ガイダンス 感染予防 ボディメカニクス
2	ベッドメイキング
3	運動と休息：体位変換 運動と休息：移動介助
4	環境調整：臥床患者のシーツ交換
5	衣生活
6	身体の清潔：口腔の清潔 手浴・足浴
7	頭皮・毛髪の清潔
8	全身清拭・整容
9	陰部の清潔・陰部洗浄 陰部の清潔・おむつ交換
10	食生活の援助
11	排泄の援助
12	実技演習：ベッドメイキング、シーツ交換 病床整備

初回の授業ガイダンスから第11回目の授業までリアルタイム授業（自宅でリアルタイムに配信される授業）が行われた。演習が中心であった授業計画は大きく変更されたが、授業項目自体は、予定されていた内容を網羅し変更はなかった。そして、国内の感染症状況を鑑み大学の許可を得て、最後の授業のみ、クラスを2つに分け三密を避けながら学内の実習室で演習を行った。学生は、今まで授業毎に自宅で作成してきた技術ノートを参考に、一人ずつ（2人1組）ベッドメイキング、シーツ交換、病床整備を実施した。

2. オンライン授業の方法

当初予定されていた授業の曜日に合わせ、Zoom（株式会社：Video Communications 提供のWeb会議ツール）にてリアルタイム授業を行った。学生は授業中に意見や質問をする際には、ミュート解除にて消音を中止し発言することができた。講義形式は担当教員やその学習内容によって様々であったが、学生のスケジュールは以下の通りであった。

- ①事前課題をリアルタイム授業までに実施する。
 - ②指定された日時にZoomに入室する。
 - ③教員によるリアルタイムでの講義（看護技術の実演や解説、VTR視聴等）を受ける。
 - ④Zoomのブレイクアウトルームに移動し、教員から事前に提案されたテーマについて少人数グループで各自の発表、意見交流をする。
 - ⑤メインルームに戻り、グループで出た意見をグループの代表者が発表する。
 - ⑥全体で情報を共有しあい、意見交換する。
 - ⑦教員からのコメントと質疑応答後、授業終了→Zoomを退室する。
 - ⑧話し合いや講義での学びを技術ノートにまとめる。
 - ⑨今回の授業の事後課題、そして次週の授業の事前課題を実施する。
- 教員は、全ての学生の表情を一度に見られず反応

が把握しきれないため、後で質問が出てきた際には manaba（本学部で採用しているクラウド型の教育支援サービス）のスレッドにて意見交換が行えることを伝えた。テキストに分かりやすい説明や図がない場合や強調したい場面については、教員が実習室の医療器具や生活用具等を画面に映しながらその場で解説、実演を行った。授業は録画されていたが、配信の見逃しや強い要望時のみ後日オンデマンド動画として提供する方法をとった。

3. アンケート方法

全ての授業が終わった後、manaba のアンケートを学生全員に実施した。回答に関しては、提出の有無や内容は成績等に影響されることはなく授業改善のために自由に記載するよう伝えられた。アンケート内容は、質問 1.「生活援助技術の授業はあなたが今後看護を学ぶ上で役に立ちましたか（選択必須）」に対し、とても役にたった、役に立った、ふつう、役に立たなかった、全く役に立たなかった、の 5 択で回答した。質問 2.「あなたがこの授業で最も良かった学びは何ですか（入力必須）」と質問 3.「この授業に対する感想・意見・要望、何でもお書きください」は自由記載で回答した。

III. アンケート結果

有効回答は 124 名中 123 名であり、回答率 99.2% であった。

質問 1.「今後看護を学ぶ上で役にたったか（複数回答あり）」に対しての回答（図 1）は、「とても役に立った」109 名、「役に立った」12 名と肯定的に表現する学生が合計 121 名であり全体の 98.3% を占めた。「ふつう」と回答した 2 名の自由記載を確認したところ、「リアルタイム授業でもかなり充実した授業だった。技術ノートを作成のためもっと実習室で学習したかった」「もっと実践をしたかった」という前向きな意見がみられた。「まったく役に立たなかった」「役に

立たなかった」という否定的な評価をする学生はいなかった。

質問 2.「あなたがこの授業で最も良かった学びは何ですか（複数回答あり）」に対する回答（図 2）において頻回に出現した言葉は、「演習」「ボディメカニクス」「ベッドメイキング」の順に多かった。中でも、演習日のことを明らかに指している回答は 61 名と約半数を占めた。その他の意見は、「看護の基礎を学べた」「技術と根拠を学べた」「実演」「グループワーク」についてであった。

図 1 今後看護を学ぶ上で役に立ったか(質問 1)

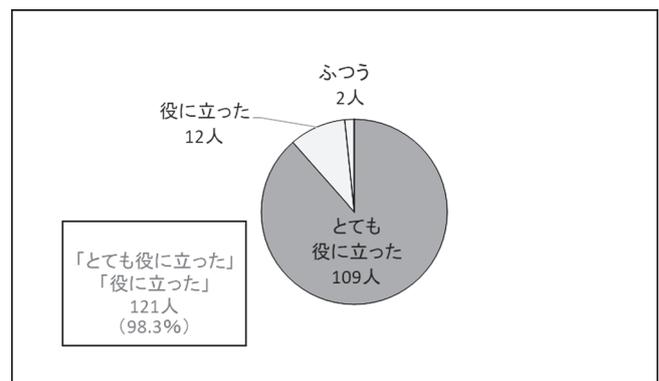
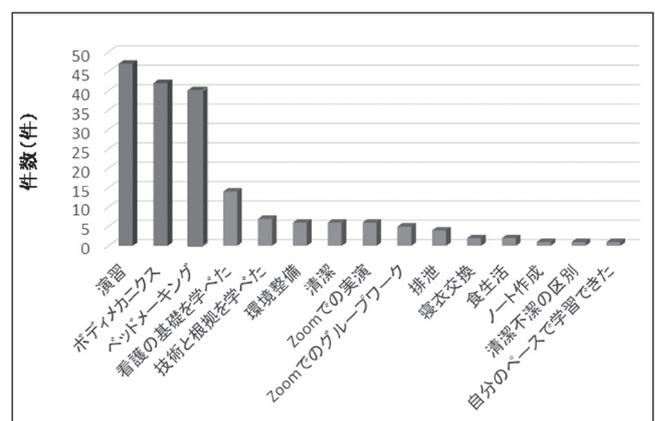


図 2 最も良かった学びは何か(質問 2)



質問3.「この授業に対する感想・意見・要望、何でもお書きください。」(表2)に対する回答は、質問2の回答と重複する内容のものが多かった。主に「リアルタイム授業に関連すること」、「演習に関連すること」「対面授業への希望に関連すること」が挙がり、その他には「学びの意欲に関連すること」、「患者の援助に関連すること」について述べられていた。「リアルタイム授業に関連すること」については、講義全体では「丁寧」「分かりやすかった」という表現が多く、

詳細ではパワーポイント等の資料や、リアルタイムで教員が技術を実演、解説する映像(体を動かす実演については個別でも記述があった)が良かった、繰り返し見られる動画が良かった等であった。「演習」については、実践して初めて分かった発見についてと、学習環境として教員の指導について記されていた。そして、一部の学生では講義内容に留まらず、看護師になる意識の高まりや患者さんの役に立てるようもっと勉強したいという今後の意気込みが語られていた。

表2 感想、意見等(自由記載)

リアルタイム授業に関連すること	<p>【講義・デモンストレーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丁寧、わかりやすかった 23 件 ・パワーポイントや映像が見れて良かった 20 件 ・繰り返し見れる動画が良かった 6 件 ・オンタイム (リアルタイムのこと) が良かった (緊張感あり怠けにくかった、家で落ち着いて受講できた等) 5 件 ・体を動かしてできて良かった 3 件 <p>【理解の深まり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・根拠がよくわかった 1 件 ・かなり知識がついた 1 件 ・看護技術の重要性がわかった 1 件 ・日常生活に看護技術を取り入れるようになった 4 件 <p>【グループワーク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの学生と交流が出来た。14 件 ・意見交流により新たな発見があった。2 件 ・皆で考えることができた。1 件
演習に関連すること	<p>【実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際にやってみて発見があった。28 件 (実践が大事、やってみて難しいとわかった) ・友達と意欲的にとりくむことができた。3 件 ・理解が深まった、コツを掴んだ。3 件 <p>【教員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問がしやすかった。4 件 ・丁寧で優しい指導だった。2 件
対面授業への希望に関連すること	<ul style="list-style-type: none"> ・早く大学に行って対面授業を行ってほしい。7 件 ・もっと練習したい。17 件 (技術ノート完成や確認したいことがあるため) ・演習が楽しみ。1 件
学びへの意欲に関連すること	<ul style="list-style-type: none"> ・これからも頑張りたい。9 件 ・学んだ知識を活かして看護の勉強に励みたい。1 件
患者への援助に関連すること	<ul style="list-style-type: none"> ・患者さんにとって日常生活援助が重要であることが分かった。3 件 ・患者の気持ちになって考えることができた。1 件

IV. 考察

生活援助技術の学習を終えて、ほとんどの学生が今後看護を学ぶ上でこの授業は役に立ったと回答している。これは、1年生にとって最も看護らしい技術を扱う初めての授業であることから当然の結果であったかもしれない。実際に、最も良かった学びについて半数程度の学生が演習日のことについて記述していた。これは、最後の授業ということで記憶がより鮮明であったこと、また、他の質問回答からも読み取れるように自粛生活後に同級生と初めて直接会話ができたこと等から、演習日のことが印象強くなった可能性は否めない。しかしそれにも増して、演習によるオンライン授業での学びの再確認や実践する困難さの実感等から深い学びを得られたようである。講義から学び、技術ノートにまとめたものを参考にいざ演習に挑んだものの、「全然思うように体が動けなかった、やってみようやく気付いた」というような新鮮な驚きが報告されていた。看護に実践は欠かせないことが再確認されたが、演習の前に行われたオンライン授業の影響も少なからず受けているはずである。先行研究においても、演習前に講義動画を視聴することによる成績等への効果も明らかになりつつある³⁾。今回の授業は演習が最後の一回だけであったにも関わらず、「とても役立つ」と授業全体の評価が比較的高かった理由を整理したい。

リアルタイム授業に関して、「丁寧」「わかりやすかった」「パワーポイントや映像が見れて良かった」という意見が多かった。中でも技術を「実演」したことについての記述が目立った。実演の一つに、自宅のベッド上に学生が臥位になり、教員の誘導を画面で見ながら体位を変え一緒に体位変換について考えるという場面があった。体を動かしながら、なぜこの方法、手順なのかを体感し自分の中に落とし込むことができたと思われる。また、看護技術を実際に実施する教員の手技と解説を視聴し自分で実施するイメージを思い描くことで、手順と根拠の繋がりが明確になったのかもしれない。これら

の「実演」により、テキストから得る知識だけではなく、思考や視聴覚的な刺激により演習に近い感覚が得られ理解を深めることにつながったと考えられる。その結果として、授業全体で学んだ内容に対して「看護の基礎」と学生は認識し、技術に伴う「根拠」を学べたという意見が挙げられたと思われる。授業後、その学びを技術ノートとして自分のスタイルでまとめる作業を学生は行っている。その際、技術の手順に合わせて根拠も並列して記すことを指導されているが、その重要性を授業から感じ取ることができたと思われる。

また、動画に関して「繰り返し」視聴できたことも評価に挙がっていた。これは見逃しや再確認したい場面を再度視聴することで、ノート作成の充実等効果的な復習が可能になったためと考えられる。看護基礎教育におけるICT（Information and communication technology）の効果に関する文献検討を行った村上⁴⁾は、演習前の動画視聴による事前学習は自分のペースで繰り返し学習することができ効果があることを確認している。今回は、何度も視聴できると一回の視聴に集中できないのではないかと危惧があり特殊な場合のみの配信に留めた。しかし、学生が自分のペースで学習できるよう基本的な手技については、いつでも自由に視聴できる媒体が今後必要であると考えられる。

そして、授業の評価を上げたものの一つとして忘れてはならないのが、「グループワーク」だと思われる。グループワークに関しては、あまり面識のない学生同士で会話が成立するだろうかという教員側の不安が当初あった。しかし、授業の回を重ねるにつれ、「グループワークが楽しかった。学びが深くなった。またやってほしい」などと率直にグループワークを称賛する学生の意見が多くなっていった。コロナ禍で自粛中の不安な心理状態の中、学生間で同じ気持ちを分かち合い関係性を築くことは授業を楽しいと前向きに捉え、勉強に取り組む大きな原動力になったと考えられる。その事は、グループワーク中に明るくやる気に満ちていた学生の表情からも推

察される。このようにやる気を引き出しながら主体的に学びも深めるためにも、グループワークは対面、オンラインどちらの授業でも不可欠であると感じた。

また、今回の授業を「ふつう」と回答した学生の「もっと実践がしたかった」という意見は、正直なところどの学生も持っていたと思われる。彼らの先輩達から、「実習室で何度もベッドメイキング等技術習得のためにかなり頑張った良かった」等の情報を得ている学生もいるだろう。また、思い描いていた看護学生の生活と、今回の限られた条件下での生活との間に大きなギャップを感じ、歯痒い思いをしている学生も多いことは容易に想像される。回答の中には「教科書や動画を見るだけでは理解するには限界がある」「動画の視聴の際にはわからなかったことや知識を(演習では)体感できた」という意見もあった。準備が整わない中で、映像の見やすさ等細かい工夫を凝らせない部分があったかもしれない。今後の課題として留意していきたい。

このように実践にはかなわないリアルタイム授業の限界はやはりあると思われるが、事前に主体的に知識を整理できるという利点も存在することが分かった。限られた時間の中で学生が効率的に学習できるよう、各授業方法の強みを活かした授業設計の工夫が必要だと考えられる。

V. まとめ

生活援助技術の授業を終えて、ほとんどの学生が今後看護を学ぶ上でこの授業は役にたったと回答した。最も良かった学びとして最後の授業である「演習」を半数の学生が挙げたが、リアルタイム授業においても、講義や実演を通して看護の基礎である技術を根拠と共に学べたこと、グループワークを通して自分の意見を深められたこと等の学びが確認された。またリアルタイム授業の課題では、実践に近いリアルな見やすい動画撮影や動画配信方法等が考えられた。

今後のリアルタイム授業では、学生が知識や技術を

吸収しやすい「実演」や主体的に授業に参加できる「グループワーク」の時間を確保すること、そして最終的には短時間でも実践においてその知識と根拠に基づいた技術を確認していく等の効率的な授業設計が望ましいと考えられる。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2020.10.3) : 新型コロナウイルス感染症に関する報道発表一覧 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00106.html>
- 2) 文部科学省 (2020.10.3) : 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について <https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf>
- 3) 忍田祐美、能見清子、小松法子他 : 基礎教育における反転授業の研究動向と課題、ヒューマンケア研究学会誌、8(2)、p43-50、2017.
- 4) 村上大介 : 看護基礎教育における ICT 活用と効果に関する文献検討、日本伝統医療看護連携学会誌、1(1)、p72-81、2020.